様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：２０１０５
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５９３１４４

研究課題名（和文）災害看護に取り組む看護師支援に関するアクションリサーチ

研究課題名（英文）Action Research on Support for Nurses in the Field of Disaster Nursing

研究代表者
太田　晴美（Harumi, OTA）

札幌市立大学・看護学部・講師

研究者番号：９０４３３１３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円、（間接経費）　　1,110,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、災害看護に携わる看護師ネットワークを形成し、災害看護教育（訓練）を実践し、研究協働者自身の変化と相互支援の有益性を明らかにすることを目的にアクションリサーチを行った。
ワークショップ（17回）開催し、災害看護教育（訓練）プログラムを策定し、実践した。研究協働者は、アクションリサーチを通して、災害看護に対する動機づけだけではなく、日々の看護業務に対する考え方などの変容があった。本研究終了後、北海道災害看護支援コミュニケーションとして組織化し、策定した災害看護教育（訓練）プログラムを継続的に実践することと、北海道内の災害看護に取り組む看護師「仲間づくり」を行っていくが決定した。

研究成果の概要（英文）：In this study, action research was conducted toward the establishment of a network of nurses in the field of disaster response and the provision of disaster nursing education (training) to clarify changes in the approaches of research participants themselves and illustrate the usefulness of mutual support.
Over a total of 17 workshops, a disaster nursing education (training) program was formulated and implemented. The action research not only motivated participants to recognize the importance of disaster nursing but also prompted changes in their approach to daily nursing practice and other considerations. At the post-research stage, the establishment of an organization named Hokkaido Disaster Nursing Support Communication was decided upon to support continued implementation of the program and ongoing networking among local disaster nursing personnel.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：災害看護　アクションリサーチ　災害看護教育　日常看護

１．研究開始当初の背景

マグニチュード（地震の規模、以下 M）６以上の地震が日本国内だけではなく世界各地で発生している。1995 年阪神淡路大震災（M7.2）が発生し、先進国といわれる日本の都市部の脆弱性が明らかになった。また日本は 2000 年に有珠山、三宅島雄山噴火、2004 年新潟県中越沖地震、2008 年岩手・宮城内陸地震と自然災害は後を絶たない。さらに 1994 年松本サリン事件、1995 年地下鉄サリン事件、2001 年アメリカで起こった同時多発テロ、それに続く炭疽菌事件などの人的災害も国内外で発生している。このような現状から災害は原因が多様化し今後も減少することはなく、起こりうる災害に、いかに立ち向かうかが重要な課題である。

災害時に医療・看護は、人々の生命を守るために欠くことのできない活動である。1995 年 5 月 10 日厚生省（現厚生労働省）健康局長通知「災害時における初期救急医療体制の充実強化について」の中で『災害医療に関する普及啓発、研修、訓練の実施』について言及され、医療機関では災害対策を強化する施設が増加している。

石本らは、「病院の看護現場では災害看護の知識は看護師に必須のものであると認識が高い」ことを報告している（わが国における災害看護教育の現状：石本章子他 3 名,平成 9 年度-平成 11 年度科学研究補助金研究成果報告書,4-31,2000）。また、石本らは「災害への関心は十分に高いが、動機づけの難しさを指摘し、看護師の日常の看護業務の多忙さから考えると、いつ発生するとも分からない災害の研修への関心はどの年齢層、設置主体、被災体験の有無にかかわらず高いものとは思えない現実がある」と述べている（意識調査から見たわが国の災害看護の現状と課題‐厚生省主催の災害医療従事者研修受講看護婦のアンケート‐：石本章子他 3 名,平成 9 年度-平成 11 年度科学研究補助金研究成果報告書,1-13,2000）。

研究者のこれまでの研究結果では、災害看護への動機づけの基盤となり、取り組みを維持するためには、ヒューマニズムやチャレンジ精神、看護に対する姿勢や思い、災害看護教育の充実、職場環境の改善、上司・仲間からの支援が影響することを報告した（災害看護への取り組みを支える要因の分析－看護師個人の動機づけとその維持－　太田晴美　北海道医療大学大学院看護福祉学部看護学研究科修士論文　1-47　2005）（災害看護への取り組みを支える要因の分析－災害看護に興味を持った経験のある看護師の動機づけ－　太田晴美　日本災害看護学会誌 Vol.9 No.1 80　2007）。災害拠点病院や看護職員が多くいる職場では災害看護について考える場、『仲間』を見つけることが比較的容易である。しかしながら中小規模の医療施設では、そのような場や機会が乏しく、施設内で共有できる『仲間』が少ない現状にある。一施設では少数であっても地域を一単位と考えてネットワークを作ることで、看護師個々の災害看護への動機づけを刺激することができると考える。

また、これまでのアクションリサーチワークショップ（以下、WS）においては、災害看護に取り組む際に近くに仲間が存在しないこと、災害看護に触れる（直接体験する・教育の機会）が少ないことという現実問題が明らかになり、災害看護と日常の看護を結び付けて考えられる教育やシステムが必要であること、本音で議論できる仲間の必要性が明確になった。（アクションリサーチ（SSM）による看護師教育支援：災害看護への動機づけ　太田晴美　2008 年度日本アクションリサーチ協会シンポジウム　口頭発表）（H21-22 科学研究費補助金（若手研究（B）課題番号 21792180　太田晴美）。しかしながら、現在までのアクションリサーチ WS で実際に知り合うことができた研究協働者が臨床場面において、WS で学んだことを生かせる行動には至っていない。そこで本研究において、共に教育プランを立案・実施・評価を反復して行うことでメンバーのつながりを強化し、災害看護に取り組む看護師の育成に寄与できると考える。

２．研究の目的

(1)日常看護とのつながりを意識できる実行可能で具体的な災害看護教育（訓練）プランを提示する。

(2)定期的なネットワークを形成し、災害看護教育（訓練）を複数行なうことにより、協働者の変化と相互支援の有益性を明らかにする。

(3)最終的に災害看護に携わる看護師の意欲の向上と相互支援できるネットワークを構築するプロセスの有用性を評価し明示する。

３．研究の方法

本研究は研究代表者と研究協働者で、問題点の明確化、実践計画の立案、実施、評価を一つのサイクルとして WS および実践を実施する。1 度の実践では、必ずしも問題に特化した実践には到達しないために、実践を評価修正し、3 年間で 3 サイクルを実施する。

本研究でデータとして取り扱うのは、WS 談話、教育（訓練）実施、教育プログラム参加者アンケート、研究代表者・協働者の内省等、多様な形態で収集されるため、研究者と研究協働者で必要なデータを決定する。妥当性・信頼性を高めるために、研究メンバーで一致するまで話し合いながらデータを検証し、随時外部から専門知識の提供を受けて分析する。

研究デザインであるアクションリサーチは「実際のヘルスケアの現場における問題を明確にし、可能な解決策を探るために行う協働的介入」（ヘルスケアに活かすアクションリサーチ、Alison Morton-Cooper 岡本玲子

他訳、医学書院、p19、2005）と言われている。研究代表者は協働者と同等の立場で意見交換・内省を行なう実践者の役割を兼ねて実施する。議論は「本音」で行い、参加者全員の意見の一致を持って、WS を進めていく。WS は、“ teaching ”ではなく“ learning ”を重視し、問題点の抽出、計画、実践、評価を連続して繰り返し、実践を変えながら進む。

データは、ワークショップ談話、教育（訓練）実施、教育プログラム参加者アンケート、研究代表者・協働者の内省等、多様な形態で収集される。研究者と研究協働者で必要なデータを決定する。妥当性・信頼性を高めるために、研究メンバーで一致するまで話し合いながらデータを検証する。（内部者立証）研究内容については、災害看護教育に関し、代表者・協働者の意見だけで構築するのではなく、災害看護に精通した専門家のアドバイスを受け、妥当性を確保する。アクションリサーチのデータは多面的に収集されるため、質的研究者からアドバイスを逐次受け、データの信頼性を確保する。（外部者立証）

（1）倫理的配慮

札幌市立大学倫理委員会の承認を得て実施する。

研究協働者に対し口頭並びに文書で説明し研究への協働同意を得た上で実施する。研究協働は自由意志の参加とし、断ること・途中でやめることができる。断っても不利益を被らないことを説明する。個人の意見や思いを語って議論をしていただくが、守秘義務を遵守する。立案した教育（訓練）参加者に対し、口頭で説明し研究への参加同意を得た上で実施する。

(2)研究協働者

災害看護に興味を持ち、過去に災害看護に関する WS 参加や学習経験のある看護師（計 16 名）。施設規模、部署、職位、経験年数は問わない。（研究者と協働者を合わせて参加者とする）

４．研究成果

(1) 第一段階：災害看護教育に取り組むための準備段階

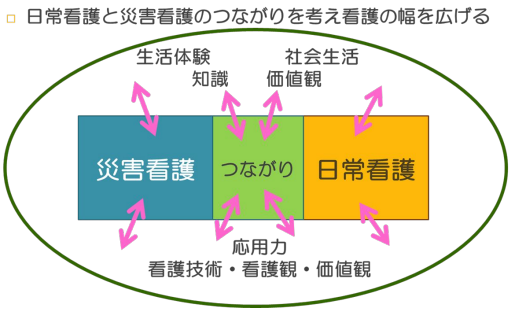
①日々の看護実践の中で災害時に有効な能力について以下の 6 項目を導出した。

コミュニケーション能力
安全（環境整備／危機管理能力）
看護技術・アセスメント能力
リーダーシップ・メンバーシップ
情報収集・伝達・共有する能力（臨機応変な表現力）
精神・身体の健康管理

日常実践している看護活動そのものが災害時に必要な技術が多くあり、災害看護は特別な看護だけではないということを再認識した。日常看護の中で災害時を意識しながら身に着ける過程には「情報不足・過剰」、「意識を持ち続けることが困難」、「興味の差」、「教育者がいない」、「多忙」などの弊害により、能力が存分に活かせない現状も示された。これらを踏まえた、波及効果が高い教育を策定し、実践評価することが必要である。

②実践すべき災害看護教育（訓練）目的・目標の策定

a)目的・目標を考える概念図



b）策定した目的・目標

目的	日常看護と災害看護のつながりを考え看護の幅を広げる。
目標	1.日常看護と災害看護の共通部分を理解できる。 2.災害時に取るべき行動が理解できる 3.看護に対する自己の変化を認識できる。

③教育実践に向けた準備（必要なスキル）

災害看護教育実践に向けては、自らのファシリテーションスキルの向上を図らなければならないと研究メンバーで学び合わなければならないと決定した。

④研修内容と方法

(a)エマルゴトレーニング（災害訓練）

(b)シミュレーションやグループワーク

⑤役割分担と研修内容

メンバーの組織化を行い、統括者、訓練チーム、グループワークチーム、スキルアップチーム、支援チームに編成し活動を開始した。

⑥プレ研修会

⑦振返り・問題明確化

(2) 第二段階

①組織再編

②プレ研修：ファシリテーションスキルアップ

(3)第三段階：教育実践

策定した研修プログラム目的・目標に合わせ臨床看護師へ教育していくための具体的方策としてプレ研修を重ねた①エマルゴトレーニング（災害訓練）で災害看護教育参加者全員が同一の災害疑似体験を行う②災害疑似体験時に感じた状況や必要なスキルと抽出したスキルは日常看護で養うことがで

きないかをグループワークを行うという教育プランを北海道内の看護師 20 名を対象に実践した。

(4)　第四段階：研究協働者自身の変化

研究協働者の一人は、WS 等に参加する前は「自分の意見を述べる事が苦手でした。ワークショップの参加により、院内・院外問わず会議の場で本音の意見を述べられるようになりました。自身の課題を克服したいという欲求が次の課題になり、一つずつ達成していくことで対外的な活動のきっかけとなりました。また院内の他職種合同の防災委員会に選ばれたりエマルゴ運営などの活動など、自分が役割を担うことができるきっかけになったのだと思いました」と語り WS に継続的に参加することは知識、経験を高められるチャンスととらえていた。

また、別の研究協働者は、「グループワークでまとめた意見をそれぞれ出し合い、どちらの考えに説得力があるかアピールし合う場面では、始めはグループの意見に固執しましたが、一人一人の考えを聞いていくと共感できることも多々ありました。自分の考えが行き詰った時は、他者の意見に視点を置き換えて議論に参加し、意見を一致させることも大事だと思いました。時間をかけて考えを一致させていく作業は、日常の看護業務では経験し難く苦労を伴いましたが達成感を得ることもでき、日常の看護においてもコミュニケーション能力の向上、情報共有に役立つと考えます。私自身、普段の会話で互いにわかったつもりが、実は異なって認識していたというケースはよくあるので、最近は共通言語を意識するようにしています」と日々の看護の中でも“言葉”を使っているが互いに都合よく解釈している可能性に改めて気づき、“言葉”の持つ意味をとらえて伝えることを再認識していた。

研究協働者は WS 以外の活動として、①公募の教育（訓練）看護師・保健師・看護教員にエマルゴトレーニングシステムを利用したシミュレーションとグループワークを開催（北海道内）②北海道看護協会支部研修ファシリテーター（苫小牧・札幌）。③看護管理者研修（稚内）④災害訓練へ模擬患者、ムラージュ、演技指導、評価等として参加協力。⑤院内並びに関連機関への災害研修（釧路）など、互いに連携協力し継続的に活動することができた。

(5)　第五段階：研究終了後の発展（ネットワーク）

研究協働者は WS という機会を定期的に持ち続けたことで、各々の災害に対する思いの変化を感じ、災害時の看護が特別ではなく日常の看護を発展的・創造的におこなうことの重要性を捉えていた。また、地域のネットワークを形成し、同じ地域に住む看護職同志がつながりを持ち続ける重要性に気づき、研究終了後は『北海道災害看護支援コミュニケーション（通称：EZO 看）』として活動していくことが決定した。

(6) 全体を通して

WS の企画・進行は、徐々に協働者自身で企画運営に移行してきた。第 8 回ＷＳ終了後、「このままでいいのか」と問われ、真剣に考え、進むべき方向性を模索した。『参加者全員が合意の上進む』が、ＷＳを継続する内に『暗黙の了解』になり、真の意思疎通が欠如していったと考えられる。メンバーの取り組みをＷＳにより、外発的に動機づけるだけではなく、内発的動機づけがなければ、災害看護への取り組みを継続させることは難しいことが明らかになった。

研究者と研究協働者で一致するまで話し合いながら進んでいくため、一人でも意見が合わない場合には、議論をし続ける結果となり、時間が超過してしまうこととなった。特に、災害看護教育の目的・目標策定は、当初予定していた以上に時間を要した。しかし、全員が「この目的・目標」という目指す方向性を納得（合意）ことにより、研究参加メンバーは、目的・目標強く意識しながら研究方法を検討することができた。また、徹底的に議論を行うことにより、参加メンバーが WS 終了時に「言い足りなかった」「自分の意見を聞いてもらえなかった」という不消化な状況を起こすことなく、達成感を得た。このように全員の合意が得られるまで議論することは時間を要するが、本研究目的の一部「研究協働者自身の変化」に大きくかかわることができるため、必要な時間であったと考えている。

マクレランドは積極的な行動と関連の深い「達成欲求」というものに焦点を当てて実証的にその重要性を論じており、達成欲求とは「価値ある目標に対して自己の力を発揮して困難を克服してその目的を達成したいという願望が強く、自らの責任をもって課題に挑戦していくなど積極性を示す傾向である」と述べている。研究協働者は WS の議論は本音で行う、参加者全員の意見の一致をもって進めていくことが確立されており、時間はかかるが、全員が一つのことを達成することを重要視して、関わることが次のチャレンジにつながると感じていた（学会発表③）。

研究協働者は、WS 以外の活動を発展的に行い、「○○やりたい」という思いのレベルから「○○する」と行動レベルに転換され、実践したことは、大きな進展と言える。また、日々の看護業務に携わりながら、災害看護を意識することが増え、それを他者へ伝えたいという意欲につながり、災害看護の普及へ寄与する一歩を踏み出していると考えられる。

所属、職位、立場、災害看護への関わり方等が異なる参加者が、平時から顔の見える関

係性・ネットワークづくりとしても機能し始め、北海道災害看護支援コミュニケーション『EZO 看』として今後も継続することが決定した。道内各地で施設の垣根を越えて互いに支援し合う体制の基盤ができた。『EZO 看』の活動は、今後より多くの施設・看護師への人財教育（訓練）が可能になることが示唆された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計　　6 件）
①太田晴美、災害看護に取り組む看護師支援に関するアクションリサーチから『EZO 看』へ、第 16 回日本医療マネジメント学会学術総会 2014 年 6 月 13－14 日（岡山県岡山市）
②太田晴美、災害看護に取り組む看護師連携、第 15 回日本医療マネジメント学会学術総会 2013 年 6 月 14－15 日（岩手県盛岡市）
③佐藤優香・太田晴美　他、ワークショップ参加後の自己の意識と役割の変化－災害看護に取り組む看護師支援に関するアクションリサーチ－、第 18 回日本集団災害医学会総会・学術集会 2013 年 1 月 15-17 日（兵庫県神戸市）
④太田晴美　他、災害看護に取り組む看護師支援に関するアクションリサーチ－ワークショップ運営の課題と研究者の学び－、第 18 回日本集団災害医学会総会・学術集会 2013 年 1 月 15-17 日（兵庫県神戸市）
⑤渡部明代・太田晴美、災害看護に取り組む看護師支援に関するアクションリサーチに参加して、日本災害看護学会第 14 回年次大会、2012 年 7 月 28-29 日（愛知県名古屋市）
⑥太田晴美、災害看護に取り組む看護師支援に関するアクションリサーチ　－日々の看護実践の中で災害時に有効な能力－、第 17 回日本集団災害医学会総会、2012 年 2 月 21 日（石川県賀沢市）

６．研究組織
(1)研究代表者
太田　晴美（OTA, Harumi）
札幌市立大学看護学部・講師
研究者番号：90433135